

地域経済ウォッチング

いわき民報 2009年5月28日(木曜日)

平という街

ソフト面の進化で活気を

東日本国際大学 経済情報学部 准教授 山田 紀浩

大学院時代の思い出に残っている講義に都市史がある。都市とは何か。その定義はなかなか難儀だ。都市計画、機能あるいは制度、法律ともに、都市は文明史上、人間の英知が集約された形で存在し発達してきた。大雑把にであるが、“都市とは人間が幸福を追求した形を表現したもの”とすれば、都市の定義についての一枠を外してないと思う。すると人間の幸福とは何かという論を詰めねばならぬが、一般的な極めて自然に、人間が幸せを感じることにあるいは夢を追うことができることと考えれば充分ではなからうか。

ところで、いわき市で都市機能を持つ街といえば真っ先に平が挙げられるが、平という街はどういう街なのだろう。歴史学や経済学的な分析ではなく、ただ40歳代いわき人の「平像」について述べたいと思う。

幼い頃、平に遊びに行くということは、とても楽しいことだった。歩行者天国での人出と賑わいは街に活気があった。大黒屋の屋上には小さな遊園地が、そしてその隣にペットショップがあり、それを見るだけでも楽しかった。最上階にあるレストランでの食事はそれだけで異空間に来ていたようだった。また街中では、当時の男の子に人気があったプラモデルの店が3階建てであったことに驚いた。そして文化センターでのプラネタリウムや、平駅ビルジャンのエスカレーターに沿って眺められた糸油の滝のようなオブジェには見入ってしまったも

のである。駅のホームにはお茶を掲げて駅弁を売っている大声のおじさんがいた。子供心に平は歩くだけでも楽しく、活気のある不思議な演出を見せてくれた街だったような気がする。

話が 30 年ほど跳ぶが、一昨年の夏、ラトブのオープンを前に、まちづくり関係のセミナーに参加したことがあった。そこであるコメンテーターが、“セミナーが始まる前に平の街を歩いてみたが、つまらなく 20 分以上歩けなかった”とぼつさり斬り捨てた。恥ずかしながら私は大学と自宅の往復ばかりで街中に出たことが殆どなかった。実際のところどうなのだろうか。そこで早速次の休日、妻と小学生の二人の子供を連れて平の街に出てみた。

石畳に舗装された道を歩き、子供の視線は道路から“ここは都会だね。”と言ってきた。しかし直ぐに、歩いている人が少ないことに気付いた。しかも 1 人、2 人で歩く人達だけで、家族で歩いている人に出会うことはなかった。2町目から1町目そして戻って3町目、4町目と歩くが確かに行く所がない。ましてや子供を連れて行く場所がない。平は、様々な年代層の人々を収容できる街であるはず。日頃平の街に出ない付けが回ったのであろうか、見つからない。食事をする場所を探したが、幼い頃異空間と感じた場所はすでにない。学生から聞いた食堂を探し入ったが、あくまで学生好みの食堂だった。確かに値段の割りにボリュームがあったが、子供向けではなかった。店は狭く客は大人ばかりしかも煙草の吸い放題。食器の片付けは後回しで、カウンターに山積みされた食器を見ながらの食事になった。楽しみにしていた娘は“こんなとこ嫌だ”と涙を見せる始末で、“もう平には行かない”と言わせてしまった。ショックだった。

ただ現在、平は生まれ変わろうとしている。駅前にラトブは完成し再開発事業は継続している。完成図を見ると夢が膨らむ。しかしこうした目に見えるハコモノ造りは、どこまでもハード面での都市開発である。建物だけあっても人がいなければ死んだ街である。街には人の流れがあって初めて活気が生まれる。そのソフト面での開発は行政や経済界でももちろん取り組んでいるし、大学でも取り組んでいる。しかし目に見えないソフト面での作業はハード面

とは異なり、地道な努力が強いられるにも関わらず、なかなか評価されないものもある。本学にもこの地道な作業に坦々と向かっている教員がいる。

平は、学生が青春の4年間を暮らす街である。七夕を前に、平がどういう街か、学生に調査させ案内パンフレットを作成させていた。あくまで学生目線で平の街を見た。路地裏におしゃれな店があったり、ビルの4階に面白いライブハウスがあった。小さい階段を上った2階に手作りケーキ屋があった。通りには定刻にだけ動く立派なからくり時計を発見した。店主と楽しい話をしたり、時に無碍にされもした。そして学生が平の街の掘り起こしをし、小さな冊子としてまとめた。パンフレットを作らせながら、学生が街に出る仕掛け作りをしていた。

これは大学生によるものだが、高校生、主婦、サラリーマン、高齢者等、多様な年代の人々による平の街の掘り起こしが必要ではなかろうか。そして平のまちづくりの一案として、その成果を冊子にまとめては如何なものか。是非はともかく、活性化のためにこうした街に血を巡らす努力を続ける必要はあろう。

最後に、例として不適當と一喝されそうだが、東京ディズニーランド。その衰えを知らない人気は完成形がないからだと言う。ソフト面でも絶えず進化している。いわきも進化し続ける街、そして都市の定義を外さず、いわき人の英知と技能を集約したまちづくりという枠を再確認すべきではなかろうか。いわきに住む人間訪れた人間が、幸福を感じ夢を追い続けることができる街として認識できる歴史を刻んでいってほしい。